

論文委員意見交換会

2008年8月29日(金)12:10-13:00

電気学会産業応用部門全国大会

議事

1. 編修長あいさつ 林編修長
2. 査読マニュアルについて 林編集長
3. 論文投稿・掲載状況 五十嵐D1副主査
4. 電子査読システムの運用状況について
五十嵐D1副主査
5. 論文委員意見と回答 五十嵐D1副主査
6. フリーディスカッション

D部門論文委員会 幹事団（H19年度）

編修長 林 洋一（青山学院大学）

編修長補佐 大石 潔（長岡技科大）

D1グループ（パワーエレクトロニクス）

主査 田中 俊彦（山口大学） ほかに幹事5名

副主査 五十嵐 征輝（富士電機デバイス
テクノロジー）

D2グループ（産業応用）

主査 大山 恭弘（東京工科大学） ほかに幹事7名

副主査 織田 利彦（松下電器産業）

D3グループ（電気機器）

主査 山崎 克己（千葉工業大学） ほかに幹事5名

副主査 松岡 孝一（東芝）

1. 編修長あいさつ

林 洋一 編修長

◆論文をよりよいものにしよう！

◆編修作業をより透明にしよう！

論文の著者と査読者に共通認識を
持っていただくことが重要

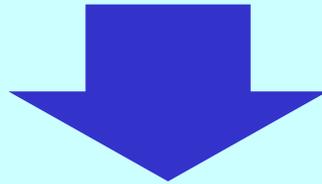
→ 査読マニュアルの周知・徹底
論文委員会ホームページの活用
ニュースレターの積極的な活用

2. 査読マニュアルについて

林 洋一 編修長

査読マニュアルの目的

- 論文査読の基準を明確にすること。
- 論文投稿者と査読者が論文に対して共通の認識を持つこと。



- **査読期間を短縮すること。**
- 査読に対する不公平感をなくすこと。
- 読みやすい理解しやすい論文を論文誌に掲載すること。

部門誌論文・査読の基本的考え方

- 論文の内容に対する全責任は投稿者にある。
- 論文の査読は論文指導ではない。
- 論文の価値の評価をするのは査読者ではなく、読者である。

投稿者は評価に耐えられる論文を作るよう、
査読者は論文を早く取り上げるよう努力をすべき。

- 次の論文を出したくなるような査読をすべきである。

何でも掲載すればよいというのでは勿論ない。
論文誌のレベルが下がれば投稿する魅力がなくなる。

査読の要点 (論文が備えるべき要件)

- 電気学術または技術に寄与するか。
- 新規性, 創意性, 有用性のいずれかが認められるか。技術面のみならず、考え方や纏め方、各種応用上の問題点の指摘など、広い観点からの新規性、創意性、有用性の判断がポイント
- 明白な誤り, 矛盾点がないか。論旨が一貫しているか。まえがきで指摘した問題点が、むすびで結論付けられているか。
- 同一内容, 類似内容が発表されていないか。
- 論文の完成度は掲載可能な水準に達しているか。

判定の基準

- 判定は4段階とし，以下の基準による。
 - 1) エディトリアルな修正のみ：掲載 (A判定)
 - 2) 修正内容が推奨項目 (Suggested change) のみ：照会后掲載 (B判定)
 - 3) 修正内容に必須項目 (Mandatory change) を含む：照会后判定 (C判定)
 - 4) 論文の要件を具備していない：返送 (D判定)
- 完成度が低く内容が分かり難い等で照会后判定 (C) の従来ケースは，返送 (D) で再投稿を促す。したがって，返送 (D) は，必ずしも新規性，創意性，有用性を否定する場合だけでない。
- 照会后掲載 (B)，照会后判定 (C) は1回のみ。

照会文の書き方 (A, B, C判定)

- 1) 必須修正項目 (Mandatory change),
2) 推奨修正項目 (Suggested change),
3) エディトリアルな修正項目 (Editorial change) に分け, 判定の根拠を明確に記載する。
- 1) の必須項目のある論文は, 照会后判定 (C) とする。
- 2) の推奨項目と3) の項目のみの論文は照会后掲載 (B) とする。
- 3) の項目のみの論文は掲載 (A) とする。

返送文の書き方 (D判定)

- **理由を具体的に、明確に記載する。**

既に発表されている論文**との違い，優位性が明らかでない，あるいは，同一内容である。

論文の目的・主張・効果などが，論文記載のデータ，実験方法では確認できず，創造性等が認められない。

理論式の展開の**部分に誤りがある。

シミュレーション，実験で用いている変数，定数の値が理論式の仮定の範囲を外れ，理論の検証になっていない，等。

- **客観的な証拠に欠けていると判断された論文については，修正の上、新たな論文としての投稿を勧める。**

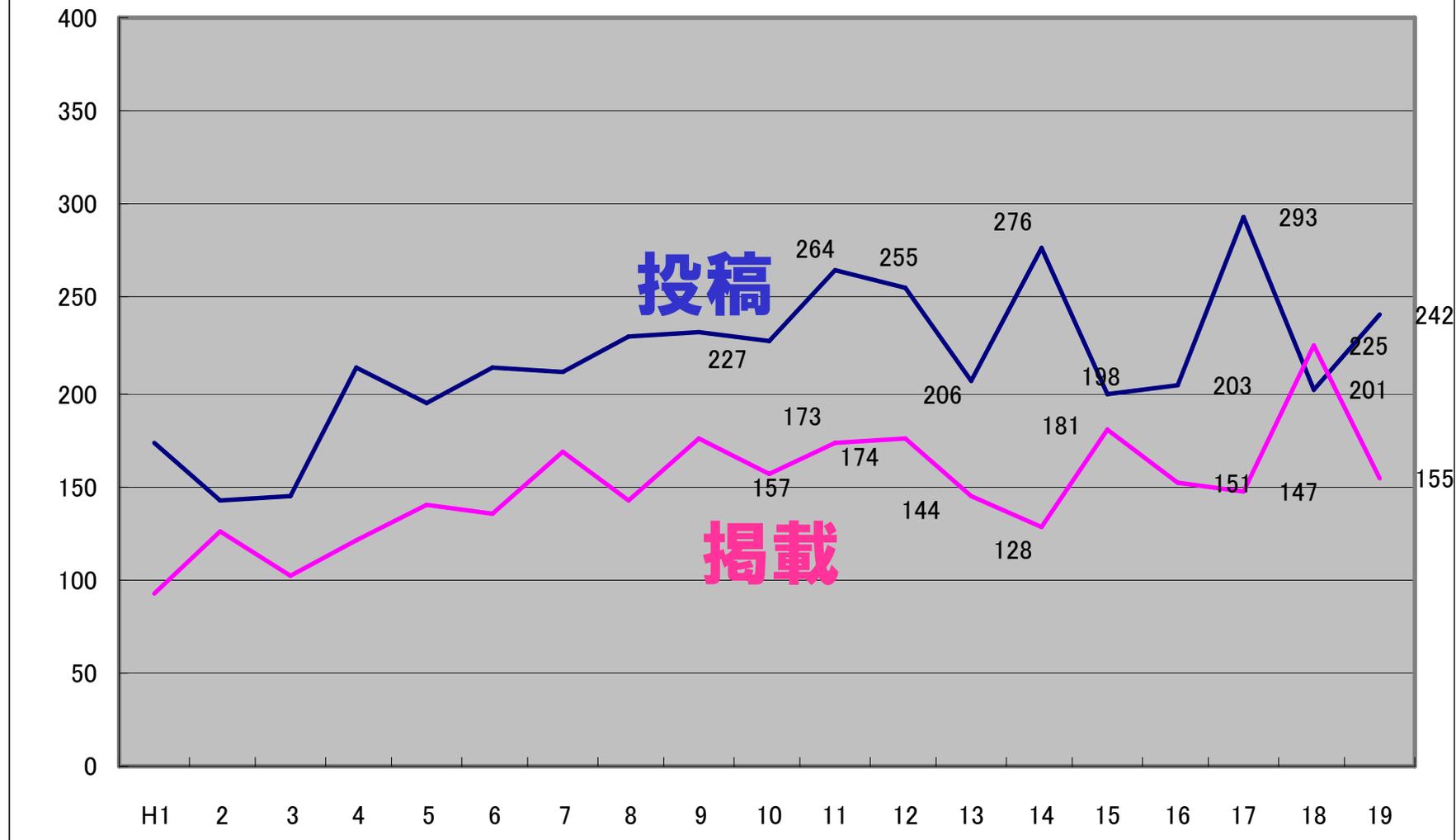
その他

- 掲載決定論文の内容の変更は、原則として誤字、脱字、フォントの不一致など、editorialな修正を除いて一切認められない。
- 掲載決定後、最終原稿を作成する過程で意図的に論文として不適切な文言を追加したことが明らかになった場合には、掲載の決定を取り消す場合がある。
- 本マニュアルの内容は常に改善ができるように、定期的に見直しを行うこととする。

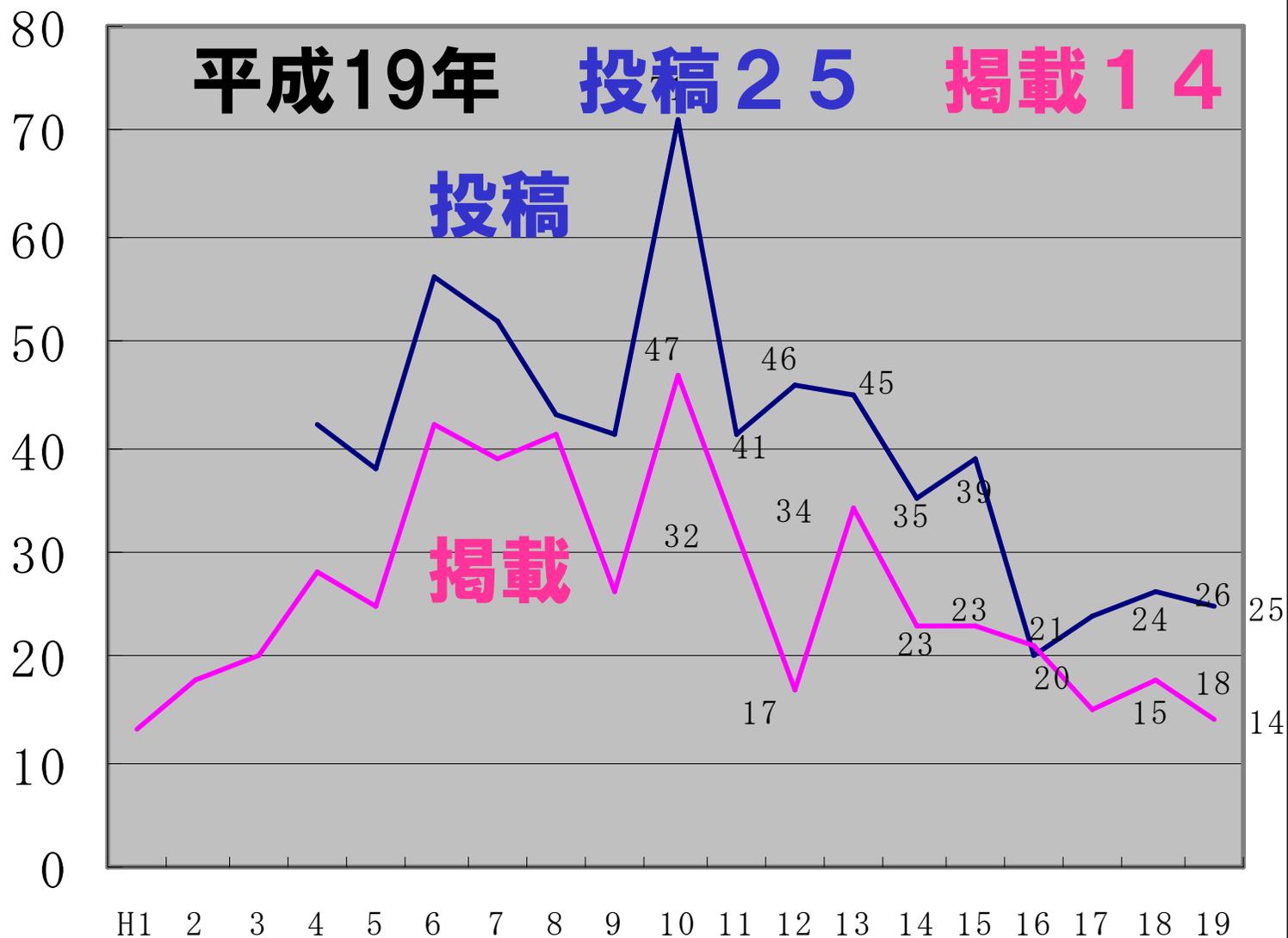
3. 論文投稿・掲載状況

D部門 論文投稿・掲載件数の推移

平成19年 投稿242 掲載155

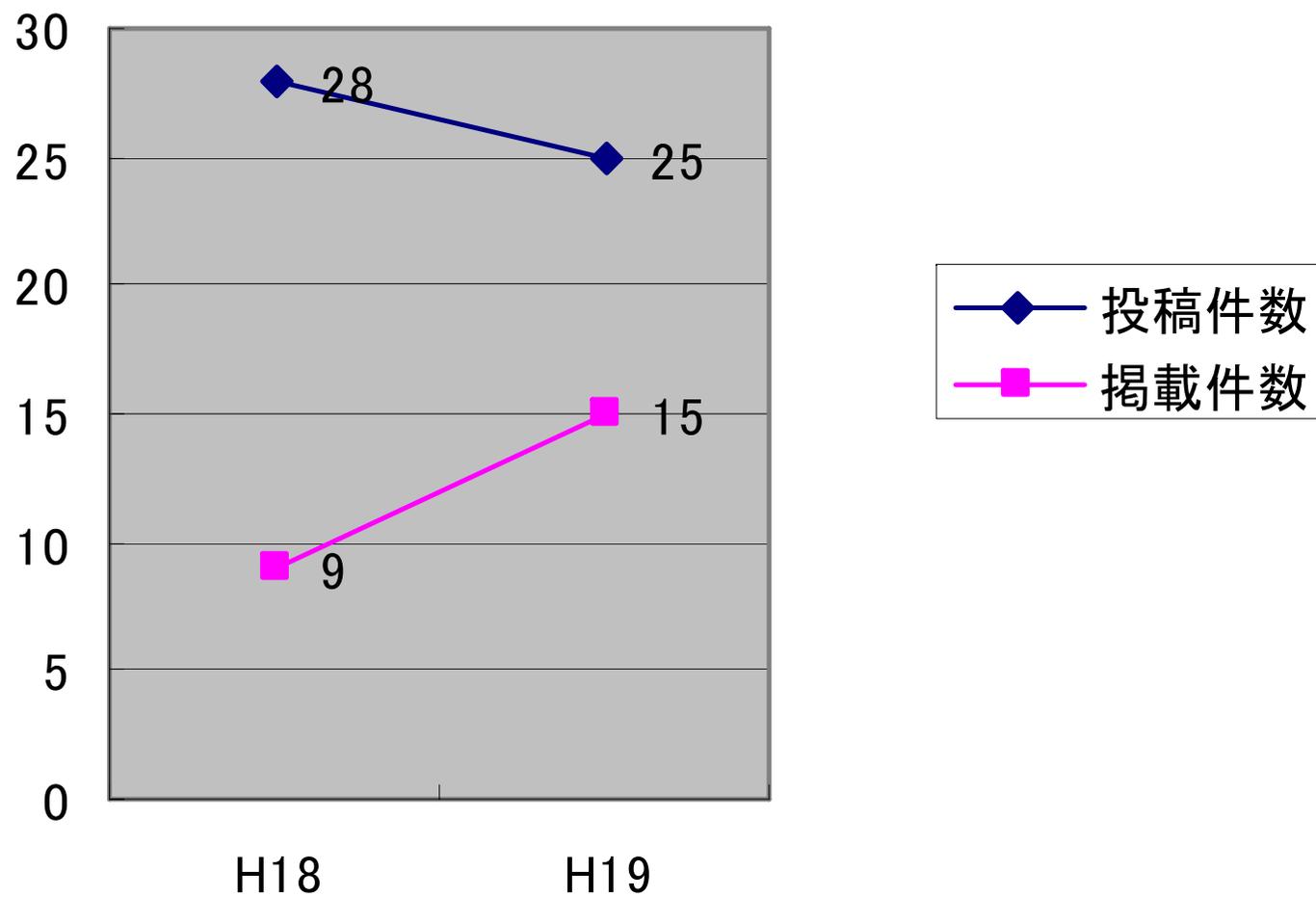


D部門 研究開発レター投稿・ 掲載件数の推移



共通英文論文誌

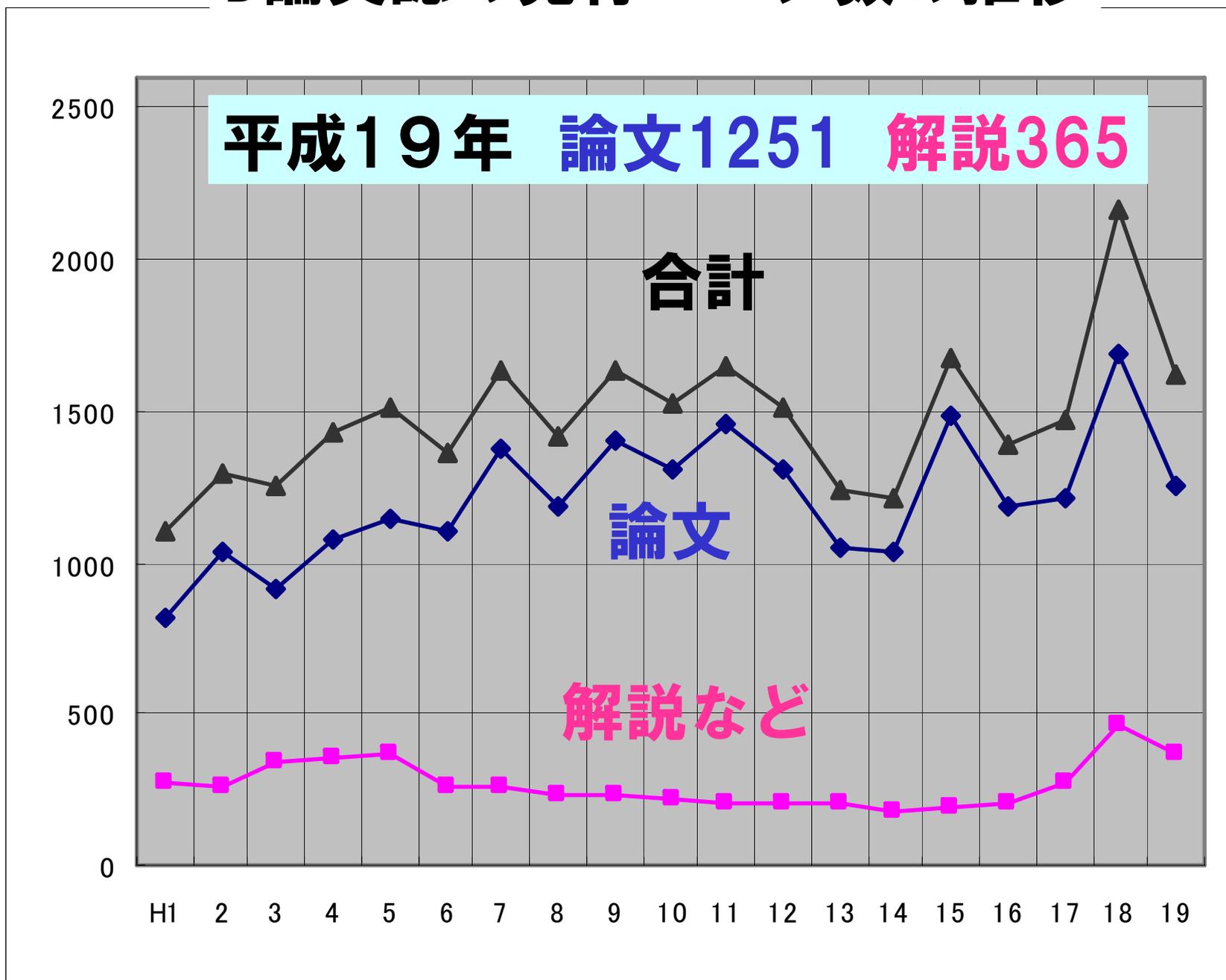
共通英文論文誌



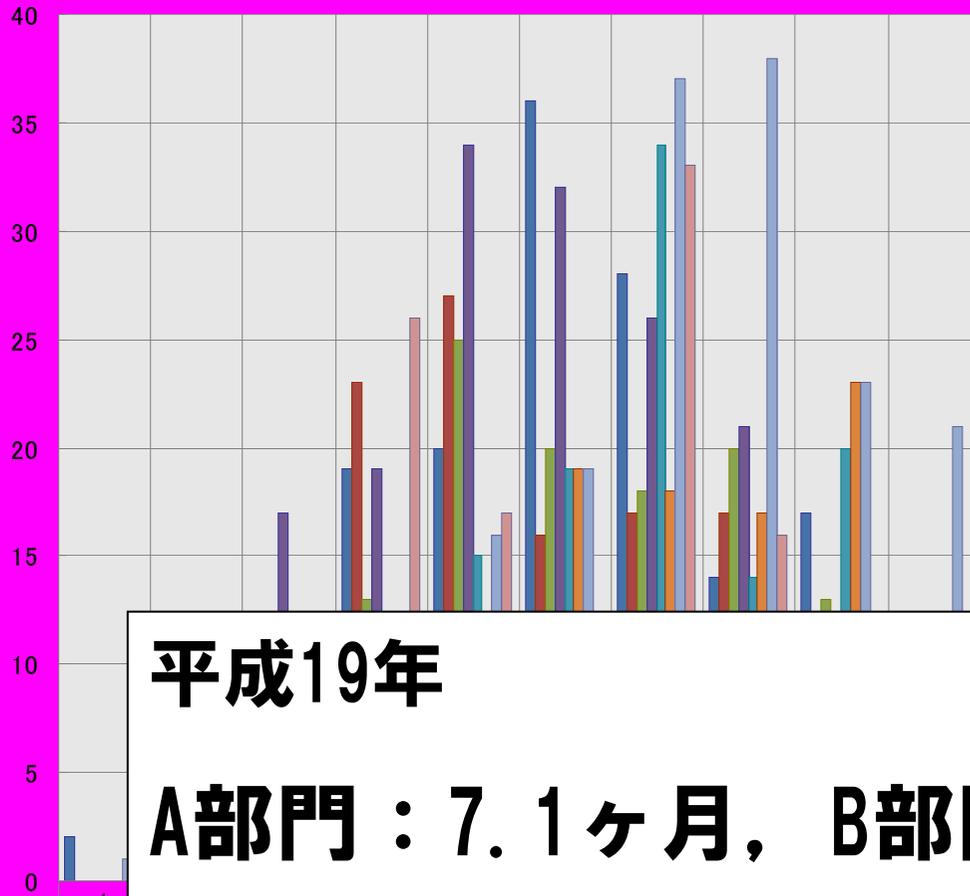
共通英文論文誌

- 平成20年度から一般論文と同様の査読**
- アメリカThomson社の“Science Citation Index Expanded(TM) (SCI)”に登録**
 - 平成20年度D部門関連の一般論文投稿が2件**
- 判定は、A, B, DのみでCが無いことに注意**

D論文誌の発行ページ数の推移



論文掲載決定までの所要月数（論文誌D）



平成14年	6.80ヵ月
平成15年	6.32ヵ月
平成16年	8.37ヵ月
平成17年	8.70ヵ月
平成18年	8.32ヵ月
平成19年	7.10ヵ月

平成19年

A部門：7.1ヶ月， B部門：6.5ヶ月

C部門：6.9ヶ月， E部門：5ヶ月

・幹事による管理の重要性

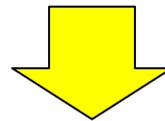
H12.1-12	2
H13.1-12	0
H14.1-12	0
H15.1-12	0
H16.1-12	0
H17.1-12	0
H18.1-12	1
H19.1-12	0

1	1	7	12	16	19	37	38	23	21	21	15	3	6	1	0	17	18
0	5	7	26	17	12	33	16	10	5	7	7	4	2	2	0	1	1

17	18
0	0
0	0
0	1
0	1
3	4
2	4
2	3

最近の傾向

- 1回目の査読の戻りが遅い委員
- 査読の早い委員に負荷が集中
- AD, BDなど, 判断が分かれる査読結果も増えている傾向



対策

- 電子査読システムの導入
- 査読ポリシーをマニュアル化し, 査読側の意識を統一

Extended Summaryのチェック

- 平成20年から，掲載が決定した論文の
Extended Summary のチェックの試行
- 全論文に拡大の方針
 - 外国人が理解できるExtended Summary
へ！

4. 電子査読システムの 運用状況について

運用状況

- 平成18年1月から，本格運用開始
- 全部門で現在は運用
 - 全部門の統一的な要望
 - 個別対応が困難
- スпамフィルタの問題
 - 査読依頼メールでSubject欄が英文
 - 日本語対応不可
- 幹事間での情報共有の困難さ
 - 紙ベースの頃は幹事全員で検討
 - 新任幹事の労力の低減が課題

5. 論文委員意見と回答

意見交換会への出欠連絡回答:81件(123件)

出席:46名(64名)

意見・質問:7件(5件)

()内は昨年度

Q5-1:意見交換会は、論文委員会で議論されている内容を、各査読委員が知る良い機会だと思っています。議論の内容は、電気学会のWEBサイトも利用されており、このような取り組みは大変良いと思いますので、引き続き継続・展開をお願い致します。

A5-1:部門大会で継続的開催したいと考えています。欠席した方にも分かるように議事内容については、論文委員会ホームページを活用していきたいと考えてます。

Q5-2: 査読依頼のメールが英文表記でくるため自動振り分け機能がSPAMメールと誤って削除してしまうことがありました。電気学会からのメールであることを件名にいられていただくような改善の検討をよろしくお願いします。

A5-2: 多くの同じご意見をいただいておりますが、管理会社から日本語化が不可能との回答を受けています。

再度、管理会社に働きかけます。

Q5-3:海外からの投稿者に対する、「再査読論文の提出の仕方」についてのガイド（英文）は、作れないでしょうか？再査読をする際に、どこがどのように修正されたのかが示されていないことが多いため、修正前の論文を照らし合わせて読み直さねばならず、大変に手間がかかります。そこで、例えば、原文と修正部分の対照表を作る、あるいは修正版の論文の修正箇所を色を付けて示すなど、修正箇所をわかりやすく示すことを推奨するようなガイドがあるとよいと思います。既にそのようなガイドがあるのでしたら、その趣旨が伝わるよう工夫が必要ではないでしょうか。

A5-3:

**実現に向けて、主査会など関係委員会で前向きに
検討します。**

Q5-4:

1. 査読委員の公開

論文査読はボランティアで、何件論文を査読してもその証拠が残りません。IEEEでは年末に年間の査読者を公表しています。論文委員(査読者)に選ばれることが、ある種のステータスになることが必要ではないでしょうか。

2. 査読結果のフィードバック

一回目の査読は、二名で行うことになっていますが、他者の査読結果を知ることはできないのでしょうか。査読結果の書き方や論点のまとめ方など、論文審査の質を改善する上でも必要なことと思います。IEEEでは、同じ論文を査読した査読者のコメントは他の査読者にも最終結果として連絡が来ます。

A5-4:

**実現に向けて、主査会など関係委員会で前向きに
検討します。**

Q5-5:昨年度後半より ある査読の終了後に、別の査読依頼が連続してくるようになりました。（1週間以内に次の依頼が来ます）。以前から指摘されていることかと思えますので調整願えないものでしょうか。

A5-5:現状、各論文委員の査読件数については把握可能であるが、平均件数の把握はできていない。主査、幹事の判断による。主査会にて議論したい。

Q5-6:査読結果において、論文委員会への連絡事項で論文を評価する英語の項目がありますが、もう少しわかりやすくないでしょうか？どういうものが、goodなのか poor なのかなど、例があるとよいです。

A5-6:

基準が明確になるよう、主査会など関係委員会で前向きに検討します。

6. フリーディスカッション

当日の意見と回答

Q6-1: Extended Summary と Abstract のネイティブチェックについて、著者とのやり取りができるのか？

A6-1: 1回の見直しは無料で実施できる。また、チェック後の修正分を採用するしないは、著者判断で決定願いたい。

**Q6-2: 電気学会の論文査読システムのID, パスワード
他部門も含め統一できないか?**

A6-2: D部門だけでは回答できないが, 事務局などに働きかけ前向きに検討します。

**Q6-3: 他分野の技術をD部門の分野で適用する場合
新規技術なのか公知技術なのかを明確にする基準が
あるとよい。**

A6-3: 基準が明確になるよう, 主査会など関係委員会で前向きに検討します。

Q6-4: 著者に査読結果が明確になるようにして欲しい。特に2人の査読結果がわからない。

A6-4: 査読結果は、各査読者の結果をまとめて幹事がトータルの判定を著者に連絡している。

しかし、ADやBDなど判定が分かれた場合は、分かれたことをわかるように説明文を幹事が追記し、著者が修正論文を直しやすいようにしたい。

Q6-5: 他部門の論文も開示できるようにして欲しい。

A6-5: D部門だけでは回答できないが、事務局などに働きかけ前向きに検討します。

Q6-6: 若手や他部門の技術者が、体系的な技術の理解ができるよう、サーベイペーパーも論文として採択願いたい。

A6-6: サーベイペーパーも論文として、採択したい。そのとき一般の論文と分けて査読できるようシステムも含め前向きに検討します。また、調査専門委員会などに取りまとめてもらうことも検討したいと思います。